

〔第31回学術集会 教育講演2〕

臨床家の感性を磨く

感性教育臨床研究所

小林 隆児

精神科医になっておよそ50年が経過した。その間、精神医学や精神療法の世界でパラダイム・シフトが起こった。60年、70年代の行動パラダイム、80年、90年代の認知パラダイム、そして現在の情動（感情）パラダイムである。今や世界の動向は「関係」と「情動」に注目が集まっている。しかし、「個」から「関係」と「情動」へと関心が移るにつれ、大きな問題に直面した。「関係」や「情動」は常に変化し続けるゆえ、ある瞬間を切り取って可視化、客観化することができない。近代科学の柱である普遍性、論理性、客觀性を重視してきた者たちにとって「関係」や「情動」をどう扱ったらよいか、混乱の真っ只中である。その一方で脳科学の世界で大きな進歩が生まれている。単一脳から複数脳を対象とする画像研究による知見である。脳と脳の同期現象が可視化され、情動エネルギーこそが脳の成熟過程を決定づけることがわかった（アラン・ショア著『右脳精神療法』）。養育者の成熟した脳との間に同期現象が起こることによって、乳児の脳の組織化が促進されるということである。

この半世紀を振り返ると、その前半私は自閉症をはじめとする発達障害の子どもたちの発達過程を追い続け、201例の自閉症追跡調査研究（1992）で一つの区切りをつけた。1994年母子ユニット（MIU）を創設し、発達障害の早期発見、早期介入、さらには予防に精力を注いできた。MIUでの活動は私の臨床スタイルを「個」から「関係」と「情動」へと

根本的に変えた。いまだ言葉を持たない乳幼児と養育者との関係を探る中で、子どもの心身の成長発達に養育者との関係の質が決定的な影響を及ぼすことがわかった。「人間の初期発達での体験を通して獲得された脳の構造と心の機能は、生涯発達を通して、その雛形として働き続けること」、「この時期の体験でとりわけ重要であるのは、主たる養育者との情動的な繋がりであること」から、生誕後の1年半の親子関係の体験が重視されるようになった。

MIUでの研究活動を通して分かったことは、のちに発達障害と診断される乳児と養育者との間で、「甘えたくても甘えられない」というアンビヴァレンスの心性が強まり、両者間に負の循環が生まれ、アタッチメント形成不全が起こること。そこで子どもは強い不安と緊張に晒されるが、その対処として様々な行動が生まれ、精神医学では症状として捉えられてきたこと、これらの行動が発現するのが1歳半から2歳の間であることなどである。親子の関係介入によって、発達障害の早期治療、さらには予防の可能性が見えてきた。

乳児と養育者の関係は情動を介したコミュニケーション中心の世界である。情動的コミュニケーションは意識の介在しない世界ゆえ、その実体を掴み取るためにには、子どものみならず自らの情動の動きを感じ取ることが先決である。感性を磨くことが求められる時代がやってきた。